穂　高　岳

昨年の連休は立山へ登り、残雪登山を満喫した。5 月の連休は貴重で、費用はかかるが残雪の魅力は何物にも代えがたい。再び雪の感触を求めて、今年は涸沢カールから穂高岳へと挑んだ。

5 月 3 日(木)　晴　松江～上高地

朝の松江駅を出発し、ＪＲにて岡山、名古屋を経由して 15 時に松本へ着いた。連休の混雑の中でも新島々行きの電車は比較的空いていた。17 時に上高地へ着くと急に人が増え、河童橋付近は新宿の雑踏の如く混雑していた。正面に真っ白な穂高連邦が良く見える。この日の夜には西糸屋で、山岳写真家の中西俊明氏によるニコン・デジカメを使った山岳写真無料セミナーがあり、飛び入り参加することができた。

5 月 4 日(金)　晴　上高地～涸沢

早朝の梓川を散歩すると気持ち良い。蒸気の立つ川面の上に、残雪の焼岳が浮かび上がる。宿で朝食を採り出発、今日も良い天気だ。明神岳を見上げながら徳沢を過ぎ、横尾に近づくと正面に真っ白の常念岳、左に屏風岩が聳える。横尾大橋を渡ると道はだんだんと雪に覆われ、本谷橋からはアイゼンを付ける人が多くなる。連休の後半に入り、涸沢から次々と下山してくる。登り優先で、皆気持ちよく山側へ避けてくれる。そしていよいよ、目指す涸沢カールが真っ白の光に浮かんで迫ってくる。4 月に入って何度か雪が積もったようで、雪原は純白だった。カールに入りカラフルなテントの建ち並ぶ道を通り、登山者で賑わう涸沢小屋へ 15 時に到着した。6 人部屋で一緒になった 2 人パーティから、今日の穂高の稜線は風強く、奥穂の登りは順番待ちを諦める登山者が多数との情報を聞いた。スキーヤー3 人グループは、明日前穂北尾根 5・6 のコルから滑り降りると言っていた。夕方の穂高の山頂付近は雲に覆われていたが、衛星放送では明日いっぱいは天気が持ちそうだ。少なくとも稜線までは行こう、と心に決めた。

5 月 5 日(土)　晴後曇　涸沢～奥穂高岳～涸沢～徳沢

朝起きると屏風の頭が朝日で赤く染まり、稜線は雲に覆われて天気が良くない。とりあえず稜線までは行けると判断し、朝食を採って身支度を整え 6 時に出発する。涸沢カールから上部は、完全にアイゼンとピッケル又はバイルの世界となる。朝の雪は締まりアイゼンが小気味良くきく。先行の登山者の列が、雪渓上部まで続いている。稜線まで続く長大な雪渓の直登で、この時期には夏道のザイテングラートは使わない。雪渓上部から下を見下ろすと、登山者の列が延々と涸沢のテント村まで続いている。運の良いことに次第に雲が取れ、涸沢岳の上空に青空が広がってきた！一面に雪の眩しい世界となり、サングラスを付ける。

穂高岳山荘に着くと、急に飛騨側から強い風を受け始める。奥穂の岩場に多くの登山者が張り付いて見えるが、渋滞している程でもない。天気は良好、青空が広がり絶好のアタックチャンスと判断した。小屋付近に荷物をデポし、サブザックで身軽に出発し、まず鉄梯子に取り付く。雪のあるルートはアイゼンがきくが、岩に氷が張り付いている箇所は危険で、慎重に岩のホールドを探す。傾斜が次第に緩くなると、遥か奥に雲の飛び交う奥穂高岳山頂が見える。振り返ると、涸沢岳から北穂高岳への稜線がダイナミックでゴツイ。山頂直下の雪壁を、ピッケルを深く刺しながら慎重に登りきると、9 時 20 分についに頂上へ！！狭い山頂で一緒になった登山者 10 名は全員 30 代以下の若者ばかり、オジさん（？）は約 1 名だった。飛騨側からの強風に、山頂の祠は氷のシュカブラにビッシリ覆われている。前穂北尾根から登ってきたという金具・ザイルの 4 人パーティの内 2 人は、意外にも 20 代の女性だった。

寒くて長くは居られないので、軽く立ち食いして早々に下山にかかる。下りは登りより遥かに難しい。頂上直下の雪壁と鉄梯子上部の岩稜は特別に慎重を要し、勇気の要る一歩は久しぶりにビビった。下には滑落止のネットが張ってあった。穂高岳山荘に着いた時は正直ほっとした。涸沢への長い雪渓の下りは、11 時を過ぎると雪が腐り足をとられる。テント村がはっきり見えてきたあたりから尻セードで 200m を一気に下る。涸沢ヒュッテで昼食を取った後、今日の宿泊地の徳沢へとひたすら下った。16 時に宿へ入り風呂で疲れをとり、夕食では隣席の 60 代ベテラン登山者のヒマラヤ談義を聞いた。

5 月 6 日(日)　雨　徳沢～上高地～松江

この日は朝から雨、昨日までの登山中に降らなかったことに感謝した。上高地に着いたのが 8 時 20 分、次のバスの予約はスムーズにできた。車窓が梓川沿いに新緑に溢れるバスに揺られながら、満足の行く山行であったことを実感した。

雑感

連休の涸沢は混むが、ほとんどが山慣れした登山者またはスキーヤーのため、整然として過ごしやすい。涸沢カールから稜線へ上がる登山者は、意外と単独行者が多く、若い女性の単独行が多いのに驚いた。特に穂高岳山荘からの岩場では半分が単独行者で、20 代 30 代の若者だった。昨年の立山では中高年登山者が多かったのとは違い、若者たちに囲まれて若返った気持ちになった。

上高地での夜に、山岳写真家

の中西俊明氏による一眼レフデジカメを使った山岳写真無料セミナーがあり、飛び入り参加した。ラッキーだった。さすがはプロ、自作の優れた山岳風景写真を紹介しながらデジカメを使った講義に時間を忘れた。朝夕でなくても構図や遠近、陰影を利用すれば立派な写真になることが分かり、大いに勉強になった。参加者は定員いっぱいの 40 人、一眼レフデジカメは主流で人気がある。デジカメは扱いやすくたくさん撮って良いものだけを残せ、写真の主役になりつつある。

教わった技術を自分のデジカメでさっそく実践してみた。今回は天気にも恵まれ、良い写真をたくさん撮ることができた。奥穂高岳への稜線で撮影した写真には、凄さを感じた。（被写体が超一級品であることは紛れもない事実だが）

最終日に宿泊した徳沢園は、井上靖の「氷壁」が有名で氷壁の宿とも言われる。小説のあらすじと、靖の訪れた記録などが紹介してあった。この一帯は昔は牧場だったそうで、この宿は牛舎を建て直してできたものだそうだ。この地が国立公園となり登山者が急激に増えて、牛が登山の妨げとなって廃業に追い込まれた。その代わりとして、山小屋の営業が認可されたそうである。

帰宅 2 日後、日焼けで顔の皮が剥け出しボロボロになった。特に口の周りがケロイド状になりお岩さん（？）状態、人に合うのが恥ずかしくなった。日焼け止め薬は塗っていたが、5 月の残雪からの照り返しによる紫外線は想像以上であった。今岡さんによると、口の周りは白のパウダーを付けるのが良いそうである。

2007 年 6 月号